

令和3年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人富山県文化振興財団	
施 設 名	富山県利賀芸術公園	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	20,433	(千円)
公演事業	20,433	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1 ※	SCOT サマー・シーズン 2021	2021年9月3日～5日	『世界の果てからこんにちはI・II』 『新版・津軽海峡冬景色』構成・演 出：鈴木忠志 出演：SCOT	目標値	1,240
		2021年11月27～28日 富山県利賀芸術公園		実績値	1,274

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価	
社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。	
「SCOT サマー・シーズン 2021」で3作品の上演を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、空間が狭い新利賀山房での『「からたち日記」由来』は10月以降に延期することとし、11月に実施した。 その後、富山県でも急激に感染が拡大したため、「SCOT サマー・シーズン 2021」の8月の日程は急遽延期とし、9月3日～5日の3日間でプログラムを凝縮して開催した。今まで培ってきた感染拡大防止策や地域との強固な関係性を活かして、9月・11月ともに無事に開催することができ、予定通りの回数の公演を実施できた。	
計画時 「SCOT サマー・シーズン 2021」で、鈴木忠志演出作品・3作品を上演予定。 開催期間：8月27日(金)～9月5日(日) 『世界の果てからこんにちは I・II』 『「からたち日記」由来』 各2回 計6回	変更後 「SCOT サマー・シーズン 2021」では、2作品を上演。 開催期間：9月3日(金)～5日(日) 『世界の果てからこんにちは I・II』 各2回 計4回 「SCOT 秋の特別公演」を実施。 開催期間：11月27日(土)～28日(日) 『新版・津軽海峡冬景色』 2回
○交流人口の増加 <ul style="list-style-type: none">・恒例となった夏以外に上演することで、「SCOT サマー・シーズン 2021」で初めて利賀に来た方がリピーターとなり知人を誘って来場したり、利賀の別の季節に興味を持った方が来場したり、新たな創客につながった。・『世界の果てからこんにちは I』には利賀で「スズキ・トレーニング・メソッド」を学んだ若い俳優が3名出演。このプログラムが長年の人材育成事業の実践の場になっている。・コロナ禍で注目される利賀の創造環境を学ぶため、若い演劇人が観劇に訪れる機会が増えている。	
△国際交流 <ul style="list-style-type: none">・新型コロナウイルス感染症による入国制限で、令和3年度も海外のアーティストや観客は参加できなかった。⇒海外の演劇人から利賀行きを熱望する問い合わせが増え、英語字幕つきで配信した舞台作品映像のアクセス数が増加するなど、コロナ後のインバウンドが期待できる。「国際化した場」としてのニーズが高まっている。	
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。	
文化的意義 <ul style="list-style-type: none">・会友組織「SCOT 倶楽部」には夏から秋にかけ新規約600名の申し込みがあり、総数は8,180名に達している。・大都市ではなく、密を避けられ、空間と時間を創造活動のために自由に使える地方から、世界水準の芸術を発信し続けてきたことがコロナ禍で改めて注目されている。	
社会的意義 <ul style="list-style-type: none">・2019年「シアター・オリンピックス」のスタッフ経験から利賀に興味を持った若い世代が、コロナ禍で自然に困まれた利賀の生活が再注目されたことを後押しに移住を決めたケースも出ている。公演時の飲食スペース「グルメ館」や、特設宿泊施設「テント村」の運営に携わり活躍している。	
経済的意義 <ul style="list-style-type: none">・感染対策や観客対応を成功例として、ノウハウを富山県内の旅行業界やイベント業界に共有することができた。・夏と秋の2回の開催により、コロナ禍で打撃を受けていたバス・宿泊といった地域経済に貢献できた。・11月公演では、観客が「なんとプレミアム宿泊券」を利用できたため、地元の宿泊客回復の一助を担った。	

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

- ・ 入場率 95%以上を目指す。 →95.1%を達成 (1,274 人/1,340 人)
※新型コロナウイルス感染拡大防止策として定員を半分にして実施
- ・ 海外からの入場者数 15%を目指す。 →新型コロナウイルス感染拡大防止策として海外からの観客の受入を行わなかった。
- ・ 支援会員 (会友組織「SCOT 倶楽部」) を前年度比の 3%の増加を目指す。 →前年度比 8.4%で目標を達成 (636 人/7,544 人)
- ・ 富山県外からの入場者数 70%を目指す。 →富山県外からの入場者は 64% (816 人/1,274 人)にとどまった。

	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度
対象公演数 :	3 作品 5 公演	3 作品 7 公演	3 作品 5 公演	3 作品 6 公演
入場者数/入場定員	1,674 人/1,700 人	1,674 人/1,700 人	861 人/910 人(*1)	1,274 人/1,340 人 (*1)
入場率	98.4%	98.0%	95.2%	95.1%
海外からの観客数 (割合)	202 人 (12%)	362 人 (15%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)
支援会員 (SCOT 倶楽部) の会員数	6,831 人 (前年比 14.6% 871 人増)	6,969 人 (前年度比 2% 138 人増)	7,544 人 (前年度比 8.2% 575 人増)	8,180 人 (前年度比 8.4% 636 人増)
富山県外からの観客数 (割合)	1,256 人 (75%)	1,139 人 (68%)	383 人 (44%)	816 人 (64%)

* 1 新型コロナウイルス感染症の影響により劇場収容人数の半分を入場定員とした。

- ・ 新型コロナウイルス感染拡大の影響により遠出を避ける傾向から、県外からの観客は例年に比べ少なかったが、一方、利賀という自然の中で、野外劇場がメイン会場となるフェスティバルという安心感から、富山県内で感染が拡大しつつある中でも地元の観客が増えた。
- ・ 「第 9 回シアター・オリムピックス」以降に黒部市での公演を定期的に行っていることから、黒部方面 (富山県東部) の観客も増えているなど、県内での浸透度が高まっている。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

当初の計画では8月27日から9月5日までに3作品の上演を予定していたが、小さい空間（新利賀山房）で上演予定だった1作品については、11月27日から28日に「SCOT 秋の特別公演」として上演した。

その後、8月に富山県でも感染が急拡大したため、8月の予定は急遽延期とし、開催期間を9月3日から5日までの3日間に短縮、この3日間に振替公演を設定し、観客数も維持することができた。

8月公演の延期を決定した段階ではすでにほぼ満席状態だったため、まずは延期となる公演を予約した観客全員に電話をかけ事情を説明、振替公演の案内を行った。約6割の方に9月公演に振り替えてもらうことができた。

その後にホームページやSNSで発表し、新規の予約も受け付けた。

直接観客と会話することで、丁寧な説明をすることができ、観客の要望も聞くことができた。逆に励ましの言葉をもったり、これまでに築いてきた観客との信頼関係がより強まった。

「SCOT サマー・シーズン 2021」終演後の観客の感想からは、「テント泊が最高過ぎて爆睡しました。ぼくは利賀村に来てからというもの、自然に対する感覚が柔らかくなりました。自然って良いなと」「背景の森と山、さえぎるものがない空と、劇場そのものが美しい」など、観劇だけではなく自然など周囲の環境も楽しんでいる様子が見えかけた。コロナ禍で自粛生活が続く中、大自然に囲まれて解放感が味わえることも利賀を訪れる魅力のひとつになっている。

「SCOT 秋の特別公演」では公演当日に雪が降り、「夏とは違った利賀の美しさにふれることができ感動しました」など、季節ごとの利賀の魅力を知ってもらうきっかけとなった。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

9月と11月の2回に分けて公演を行ったため、連絡バス運行経費、駐車場等の警備、検温・消毒などのコロナ対策関連経費は増額となった。

一方、9月と11月に公演を分けたことで、劇団 SCOT 以外の出演者、スタッフの人数が減り、その分宿泊料や国内交通費の支出を節減できた。

また、新型コロナウイルス感染症防止対策として、客席数を劇場定員の半数にしたため、広報戦略を支援会員中心にして、ポスターや新聞広告などを取りやめた。これにより印刷製本費や広告宣伝費の支出減となり、予算内で執行することができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

劇団 SCOT 主宰・鈴木忠志氏は、1976 年富山県利賀村（現南砺市）に劇団の本拠地を移して以来、45 年間にわたり質の高い作品創造や世界演劇祭「利賀フェスティバル」の開催を続け、国際的に評価を得ている。南砺市、富山県、（公財）富山県文化振興財団は、基盤となる環境整備を長い期間かけて鈴木忠志氏と共に行ってきた。⇒優れた実績と環境により「演劇の聖地」と評され、コロナ禍でも活動を継続できたことでさらに価値を示した。鈴木忠志氏インタビューより「利賀はシアター・オリンピックスによって、日本を代表する国際的な文化拠点であるという認知度が一層高まった。事業を継続しなければ、将来の展望が開けない。演劇祭を中止しては、文化がアウトになる。感染対策をきちんとして演劇祭を継続できるなら、継続しなければならない。そんな思いで、あえてコロナ禍で上演を決めた」（富山新聞 8 月 25 日）

北陸三県の舞台芸術拠点

富山県・石川県・福井県からの支援会員が近年増加傾向にあり、全体の約 5 割を占める。

令和 2 年度：354 名増加	令和 3 年度：221 名増加	令和 3 年度末時点：総数 3,984 名
-----------------	-----------------	-----------------------

- ・「第 9 回シアター・オリンピックス」で金沢 21 世紀美術館が高校生の観劇ツアーを企画。好評だったことから令和 3 年度も企画された（新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止）。
 - ・金沢文化服装学院の学生、先生が毎年団体で来場。令和 3 年度は 2 回来場。
 - ・令和 3 年度は、金沢観光と利賀の観劇を組み合わせた旅行商品を開発したいということで、金沢市ホテル懇話会がツアーを企画（新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止）。
- ⇒北陸三県の舞台芸術の拠点として重要な位置を占めてきている。

コロナ禍にも強い野外劇を上演

- ・『世界の果てからこんにちは I』は、池と山々を借景にした野外劇場で劇中に花火を打ち上げる、利賀でしか上演できない代表作品として大変人気がある。
- ・野外劇場の開放的な空間で安心して観劇ができることもあり、予約開始後すぐに満席になった。

舞台芸術関係者への影響

- ・利賀はコロナ禍でも実施可能な演劇祭のモデルとして、安全に実施するための運営方法を毎年提示している。検温済みの観客にリストバンドを配布、座席番号をカードに記入して終演後提出してもらい、自由席であっても、観客が座った座席を把握するなどの感染症対策が、他地域の演劇祭でも参考にされ、取り入れられた。
- ・都会で活動制限を受けた若い世代の演出家らが「SCOT サマー・シーズン」に来場。地方拠点の成功例である利賀の演劇祭を目の当たりにし、「『文化の灯を消してはいけない』というメッセージに勇気づけられ、自分たちも継続していこうと決心した」などの声がきけた。

新しい文化拠点のあり方を提示

- ・コロナ禍で始めた劇団 SCOT の農耕活動は年々拡大し、農林水産省のホームページ「農山漁村発イノベーション事例集」の中で、「芸術×農業」の先進事例として紹介されている。
- ・「SCOT サマー・シーズン」の観客に、劇団員が育てたカボチャをプレゼントするなど、そのユニークな活動を広くアピールした。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

11月公演にあわせて、利賀村元気市実行委員会が「2021秋 利賀元気市」を飲食スペース「グルメ館」で開催した。

<利賀村民謡披露>

- ・利賀こども民謡（利賀小学校の子供たちで構成） 「炭焼きじいさのくどき歌」「たろじ」
- ・利賀村むぎや節保存会（利賀地域の婦人会、青年団などで構成） 「長麦屋」「古大臣」「麦屋節」

同時に「利賀食堂」を出店して岩魚塩焼き、利賀そば、熊汁、清流そうめんなど地元の特産品を観客に販売した。

○地元新聞での評価

【富山新聞9月5日】演劇の灯きらめく 南砺市利賀 SCOT、舞台で熱演

「日本について考えさせる名物劇『世界の果てからこんにちは』のⅠとⅡを上演し、コロナ禍の今こそ作品に込めた思いを伝えようと熱演を繰り広げ、利賀で守り続ける演劇の灯を今年もきらめかせた」

【北日本新聞9月6日】SCOT サマー・シーズン最終日 迫力演技 花火が彩り

「『世界の果てからこんにちはⅠ』は<中略>鈴木さんの過去の作品から日本について考えさせる場面を集めて構成し、日本人の心性を表現した」「夜空に大輪の花火が咲き、出演者の迫力ある演技に盛大な拍手が送られた」

○全国紙での評価

【毎日新聞9月16日】富山・利賀芸術公園で上演 「劇団SCOT」が問うコロナ禍の世界

「新型コロナウイルス禍が深刻さを増し、政局が風雲急を告げている。そんな世相の中、山あいの地からあれこれ思いを巡らせられる得難い時間となった」「さまざまな言論的素材によりニッポンやニッポンジンについて考えさせる鈴木さんの代表作『世界の果てからこんにちは』の『Ⅰ』と『Ⅱ』の新演出による連続上演の試みが、いまの混沌とした日本と世界を鋭く突き刺した」（論説委員・濱田元子）

【日本経済新聞9月18日】鈴木忠志が挑む「演劇と農」 辺境から「日本人とは」30年

「日本人とは何か。そんな問いに向き合う演劇が富山県の山村で続けられて、30年がたった。午前には農作業、午後には演劇。82歳の演出家、鈴木忠志が利賀（南砺市）で生み出した『演劇の国』は、社会のあり方を見直す場として存在感を増している」「鈴木演劇の醍醐味は移動を含めたトータルな体験にある。<中略>都会人を日常から切り離し、辺境から日本を見直してもらう。それが鈴木演劇の形だ」（編集委員・内田洋一）

○専門誌での評価

【テアトロ2021年11月号】「サヨナラの勧め」—観劇後はカボチャをどうぞ（河野孝）

「コロナ禍で全国各地のフェスティバルが影響を被る中、利賀村の『SCOT サマー・シーズン2021』は演劇の“聖火”を灯し、明日への希望をつなげた。8月の公演は延期としたが、9月初めの週末（3～5日）に全力集中した濃密なプログラムを展開した」

○支援会員からのメッセージ

「恥ずかしながら世界に誇れるほど素晴らしい団体が富山にあることを最近知りました。富山県民はもっと自慢するべきだと思います」

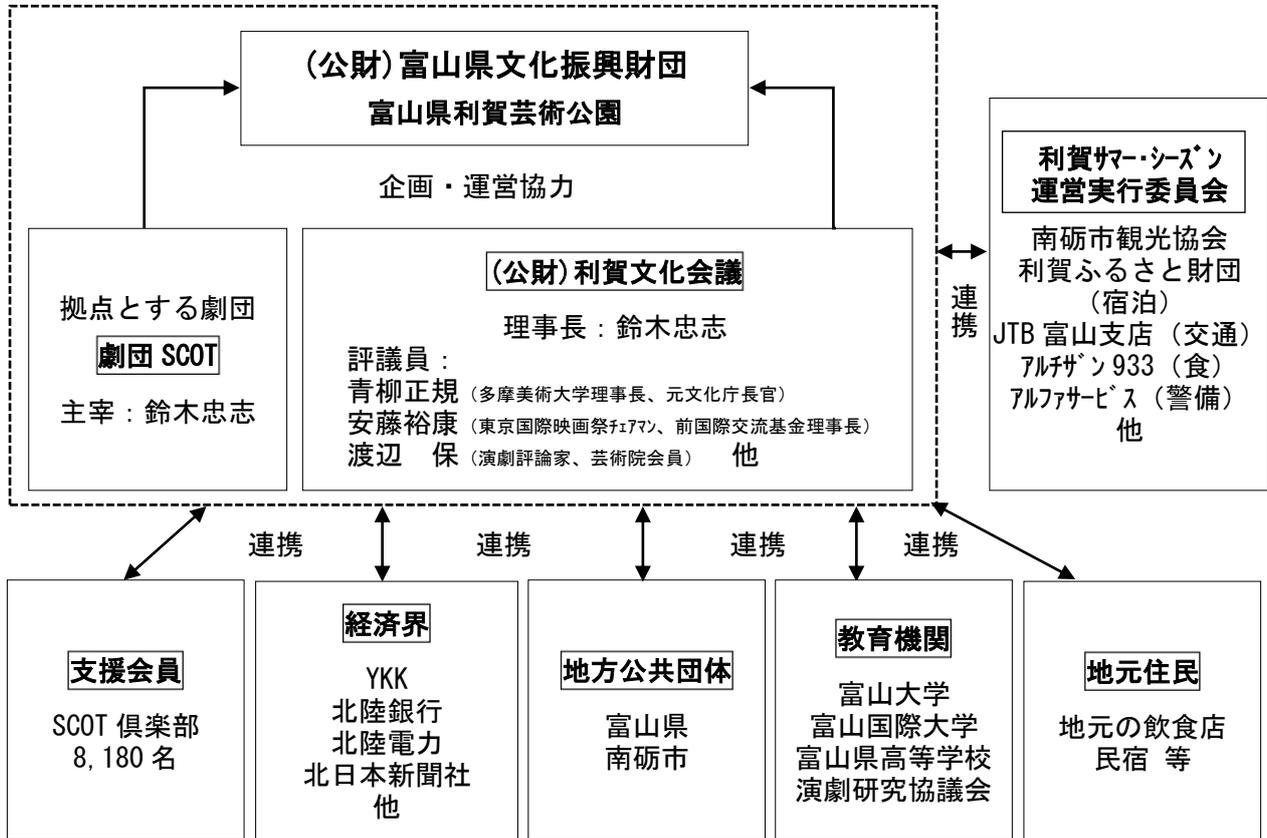
「毎年のように来ているが今年は特に花火を見ながら日本の歴史やコロナ禍の世界について考えさせられた」

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

事業を実施するにあたり、様々なレベルの関係団体と連携をとり、フィードバックを得ながら長期的視野に立って活動を展開している。



・「SCOT サマー・シーズン」、「SCOT 秋の特別公演」の観劇予約は電話のみで受け付けている。観客と直接コミュニケーションをとることで、それぞれの細かい旅程なども把握できるため、バスや宿泊の調整に活かしている。観客との密なコミュニケーションにより、コロナ禍でのイレギュラーな日程変更も大きな混乱なく行えた。

・2013年より利賀におけるSCOTの公演は、公演に対する入場料金ではなく、SCOTの活動自体を社会事業として応援する気持ちを自由に「お志」としていただく形をとっている。観客＝支援者として、享受するだけでなく双方向の関係性ができあがっている。

・近年、新型コロナウイルス感染症拡大下での開催という難題に対して、利賀サマー・シーズン運営実行委員会は、各分野のノウハウを持ち寄って運営に当たっている。

・宿泊・交通の予約担当や、飲食スペース「グルメ館」や警備など現場の担当などがそれぞれの立場で、来場者の要望や気づきを共有し、翌年のプログラム組みやバスのスケジュール決定に反映させている。

・富山県利賀芸術公園の設置者である富山県、所在地である南砺市の担当者とは事業の計画時、実施前、実施後と綿密に打ち合わせを重ね、改善点を事業に活かしている。